

漢語文献に見えるイスマイリー派への言及

成瀬哲生

—

1993年夏、中央アジアがトルコ化される以前のイラン系住民の子孫といわれる、タジク族の生活圏であるグルミット以北のゴジャール地区で、グルミット、グルキン、パサーの三つの村を中心に教育事情を実地調査することができた。ゴジャール地区は、パキスタンのフンザ地方北部一帯である。フンザの言語はブルシャスキー語であり、ゴジャールの言語はワヒー (wakhi) 語 (イラン語系であるタジク語方言の一つ) である。フンザの人々がインド系からモンゴル系までの様々な混血の様相を示しているのに対し、ゴジャールのタジク族は眼で見る限りコーカソイド系で、ブロンドも多く目についた。

C. P. Skrine 『CHINESE CENTRAL ASIA』 (First published by Methuen & Co. Ltd. 1926) にゴジャール地区について興味深い記述がある。「グルミット (Ghalmit) の村人たちは、不思議なことに、ほとんどがワヒー人 (Wakhis) である。もとをたただせば、[アムダリヤ川上流の] オクサス (Oxus) 川源流近くのゴジャール (Guhyal)、ヒンズークシの彼方の、世界の屋根パミールのさらに向こう側から移り住んだのである。それゆえフンザのこの地域は、リトルゴジャール (Little Guhyal) の名があるのである。」彼らの origin を考える上で参考になる。この点に関しては、グルミットの小さな歴史博物館で購入した、HAQIQAT ALI 『WAKHI LANGUAGE BOOK』 (WAKHI CULTURE ASSOCIATION) の序文にも類似の言及がある。「ワヒー (Wakhi) という語そのものがワハン (Wakhan) が語源である。ワハンとはワハンからの移住者を意味する。これはワヒーの起源がワハン・バダクジャンと中央アジアにあるからである……」

しかし、歴史的には移住者であるらしいゴジャール地区のワヒーの人々も、宗教的にはフンザの人々と共通している。共にイスラムの一派であるイスマイ

ーリー派である。ゴジャール地区における実地調査については、辻本雅史「フンザの教育事情と子どもたち」に詳しいので、ここではゴジャール地区も含む、フンザ地方全体の特異性(教育事情に関して言えば、子供たちの100%に近い就学率の高さ)がイスラムの一派であるイスマイリー派の活動と関係の深いものであることを踏まえ、そのイスマイリー派が中国の漢語文献の中でどのように言及されているかを見ることで、中巴国境のクンジュラブ峠以南と以北の高地住民であるタジク族の今後の比較調査に備えたい。なお、訳文中の人名等の固有名詞は、漢語表記からの類推による。

二

『新疆縦横』(1991年10月 中央民族学院出版社)によれば、中国におけるタジク族は、人口33,538人(1990年)で、その約60%が新疆ウイグル自治区タシュクルガンタジク自治県に居住している。言語は、二方言に大別される。サリクル(色勒庫爾)語とワハン(瓦罕)語である。『WAKHI LANGUAGE BOOK』と高爾鏘編著『塔吉克語簡志』(1985年3月 民族出版社)における、たとえば一から十の数を比較すると、表音方法の差異のみではなく若干の地方的差異もあるのかも知れないが、ワヒー語がワハン語に酷似していることは、明らかである。

	ワヒー	ワハン	サリクル
1	y e u	j i u	i u
2	b u i	b u i	ð o u
3	t r u i	t u r u i	a r o i
4	t s e b u r	t s u b u r	t s a v u r
5	P a n z	p a n d z	p i n d z
6	s a d	ʃ a ð	χ e l
7	h u b	u b	u v d
8	h a t	a t	w o x t
9	n a w	n a u	n e u
10	<u>d</u> a s	ð a s	ð e s

また身体語についても次のごとくである。「むね」のみが対応関係で例外的であるが、ワヒー語とワハン語は、同一方言といってよいであろう。

	ワヒー	ワハン	サリクル
あたま	S a r	s a r	k o l
かみのけ	ʃ a f ʃ	ʂ a f ʂ	x a d
みみ	Y i ʃ	ʎ i ʃ	K o u l
まゆ	V e r a w	v u r ə w	v u r o u
め	ç e ʒ m	t ʂ ə ʒ m	t s e m
はな	m i s	m i s	n o d z
くち	Y a ʃ	ʎ a ʃ	K o v
ほほ	L u ŋ j g	l u n d ʒ	q a p u z
むね	P ú z	p u ʃ b a r	p u z
はら	ɖ ú r	ɖ u r	ɖ o u r
かた	Y i s p	j i s p	s e v d
うで	b ə r e t	b ə r ə t	t ʃ a r o s t
て	ɖ a s t	ɖ a s t	ɖ u s t
あし(膝以上)	L e ŋ g	l ə ŋ g	s o n
ひざ	b i r i n	b u r i n	z u n
あし(膝以下)	L e ŋ g	l ə ŋ g	l a ŋ g
あし(足首以下)	P æ ɖ	p u ɖ	p e ɖ
かかと	P o ʃ t	p o ʃ t	n a b u r g

『塔吉克語簡志』は、ワハン語について、次のように説明している。「ワハン語人口は数千人である。ワハン（瓦罕）語を話す人々が比較的集中しているのはダブダ（達布達）村である。そこでの日常の生活はワハン語で営まれている。ワハンは、地理上、パミール南部のアフガニスタン東北部の狭く長い地帯にある一地名であり、またワハン山脈の峡谷を流れる川の名でもある。ワハン川は、パミール南部の山間の川と合して〔アム・ダリヤ川上流の〕ピャンジ（噴赤）川の源流となっている。川沿いはワハン回廊の名がある。ワハン語を話す人々は、アフガニスタン、中国、ソ連、パキスタンの国境地帯に住む。ワハン語は、大きく中部、東部、北部、西部の、幾つかの地方方言に分かれる。中国内のワハン語を話す人々は東部地方方言に属す。」ダブダは、ダフダル(Dafdar)のことではないかと思われる。漢語表記では、しばしば語尾の「r」が抜けることがある。聖墓を意味する「mazar」は漢語表記では「麻札(maza)」である。ダフダル村について、『CHINESE CENTRAL ASIA』は、アフガニスタンからのワヒー移住者のコロニーであると述べている。C. P. Skrine は、1922

年7月にミンタカ峠を越え、ダフダルを経由し、タシュクルガンに到着している。「ダフダルは、アフガニスタンからの移住者である、ワヒーのにぎやかなコロニーで、あたかも荒野にバラのように咲いた花であった。ダフダルからは、平坦で何の変哲もない34マイルの道がタシュクルガンに続いている。」ダフダル村に集中している、ワハン語を話す人々とは、ワヒーの人々なのである。フンザのゴジャール地区のワヒーの人々と、そのoriginも共通しているものと思われる。グルキン村で逢った青年の祖父は中国側に住んでいるとのことであった。青年の祖父は、この数千人の一人であり、あるいはダフダル村の住人であろうか。アンヌ・フィリップ『シルクロード・キャラバン』（吉田花子等訳 晶文社）にもダフダル村が出てくる。中国革命前年の1948年5月28日にタシュクルガンを出発したアンヌ・フィリップは、翌日の午後ダフダルに到着している。「午後、川を見おろす位置に建つ、岩石と見まごうばかりの孤立した要塞に入る。そこからは一望のもとに川が見渡せる。標高三千六百メートルのダフダルである。荒涼たる峻厳な風景。一本の木もなく、緑色のものは何もない……。日が沈み、正面の黒々とした陰鬱な山は、しわの寄った老人の顔のように山はだをさらけ出している。キャラバンは水辺に設営する。要塞にはタジク族の一家と数人の兵士が住んでいる。」言及はないけれども、このタジク族の一家もワヒーであったろうと思われる。ただ、四半世紀の間にダフダルの様子が余りにも大きく変わったようである。花が枯れたように人の姿が少ない。アンヌ・フィリップが前日の28日に休憩したタジク族のユルトでの主人のせりふが、あるいは事態を説明しているのかも知れない。「私はアフガニスタンに行きたいのです。ここでは自由にできませんから。でも出ていこうとするのが中国人に知れたら、彼らは私の首を刎ねるでしょう。」出て行きたい場所がアフガニスタンであることからすれば、このタジク族のユルトの主人もワヒーであったに違いない。ダフダルの荒涼化と中国領土からの脱出に処刑で対応しようとしている状況からして、当時すでに相当数のワヒーの人々が中国領土からアフガニスタンあるいはパキスタンへと脱出していたものと思われる。

宗教的には、サリクルであれ、ワハンであれ、中国側のタジク族もイスマイリー派であり、パキスタンのフンザ地域と共通している。中国のイスラムの大半は、スンニー派である。クンジェラブ峠以北の中国側におけるイスマイリー派の活動がどのようなものであるか、フンザでの調査で大きな関心を持つ

に至ったことが、帰国後のタジク族に関する漢語文献収集の動機となった。短時間の滞在であったタシュクルガンでは、数人のタジク族と会話を交わしたのみであるが、前日まで顔を合わせていたゴジャール地区のタジク族とは何か異なる印象を受けた。この印象の落差も、いま一つの帰国後のタジク族に関する漢語文献収集の動機である。

三

中国側のタジク族について、日本でも言及がなされていないわけではない。ただその論述はかつての中国の少数民族政策を無批判になぞっただけではないかと、今日からすれば、思われる。一例を挙げれば、次のごとくである。「タジク族は、牧畜を主産業とする半遊牧半定住の生活を、一九五九年に人民公社化するまでいとなんできた。解放前には羊とヤクと畑のほとんどは牧場主が独占していて、タジク牧夫は百頭の羊を一夏飼っても、労賃としては綿羊一頭と子羊一頭をもらえるだけだったという。したがってタジク牧民の七〇パーセントは常に半飢餓状態にあった。解放後、民主改革が行われて、牧場主の封建的特権は廃止され、一九五三年に土地改革が完了、一九五九年には人民公社化が実現した。タジク族の生産建設のテンポは急速で、全県の家畜は一九四九年の二万七千頭から、一九六三年には十二万頭という急増ぶりである。」(『中国の少数民族』1973年6月 毎日新聞社)

『新疆縦横』にも、タシュクルガンタジク自治県の家畜頭数についての記述がある。「全県の家畜業は、解放後に大きな発展を遂げた。1949年のタシュクルガンの家畜総頭数は僅かに27,500頭余りで、当時の全県の総人口で案分すると、一人につき2頭余りの所有に過ぎない。1989年末の家畜の飼育頭数は133,218頭であり、1949年の4.84倍である。現在の総人口で案分すると、一人につき5.4頭余りの所有になる。」

どちらも同じような論述パターンで順調な発展を遂げたことを伝えている。しかし、こうして二つ並べると、統計としての信頼性が疑われる数字であることがわかる。1963年と1989年の家畜の飼育頭数は、120,000頭と133,218頭である。何と26年もかかって13,218頭しか増加していない。そこで手元の資料により、中国国内におけるタジク族の総人口(A)とタシュクルガンのタジク族人

	(A)	(B)	(C)	
1949		13,750人?	27,500頭	『新疆縦横』
1953	14,462人	8,677人?		『中国民族統計』
1963	15,000人	9,000人?	120,000頭	『中国の少数民族』
1964	16,236人	9,741人?		『中国民族統計』
1978	22,000人	13,200人?		『塔吉克族簡史』
1982	26,503人	15,901人?		『中国民族統計』
1985	26,600人	18,074人		『シルクロード文明の旅』
1989		20,566人	133,218頭	『新疆縦横』
1990	33,538人	20,122人?		『新疆縦横』

口(B)と家畜の飼育頭数(C)を整理してみた。(B)の人口に?を付してあるのは、タジク族の総人口の約60%以上がタシュクルガンに住むとされているので、(A)の60%を仮にタシュクルガンのタジク族人口としたからである。ただし、1949年のみは、1人当たり2頭の所有であったとあるので、家畜の飼育頭数を基にした数字である。

1963年の120,000頭が事実とすれば、1989年のタジク族の人口は、1963年の二倍強であるから、1963年以降、四半世紀、牧畜は発展ではなく、実質的には衰退しているというべきであろう。しかし、1963年以降の人口増は、生産力の発展をそれなりに反映していると思われるので、むしろ120,000頭が大躍進時代風の誇大宣伝による数字なのであろう。またタシュクルガンのタジク族の人口が、牧畜が大発展したという1949年から1963年にかけて、13,750人から9,000人前後に減少しているのではないかと推定されることが注意される。これは、国民党支配下のみならず、共産党支配下でも中国国内に居住することを嫌って国外に出た、タジク族(主にワハンであろう)が相当数いたことを示している。このように見て来ると、『天山シルクロード』(1984年12月 恒文社)の次のような言葉は、空々しく響く。「人口わずか数千を余すのみとなったこのタジク県も、新中国成立後は、人口も倍加し、一万八千余人となった。産業もおおいに栄え、特産品の加工・国内移出、そして対外貿易と目覚ましい発展を遂げている。」

この記述によれば、新中国成立前のタシュクルガンの人口は数千人である。一万八千余人が、タシュクルガンのタジク族のみの人口ではないにしても、或る程度1980年代の実態を反映している数字とすれば、発展を人口増で印象づけるためには、新中国成立前の人口はより少なくなければならない。人口が倍加

して一万八千余人となったということは、新中国成立時の数千人というのは、実際には九千人前後を意味しよう。この数字は、「1949年のタシュクルガンの家畜総頭数は僅かに27,500頭余りで、当時の全県の総人口で案分すると、一人につき2頭余りの所有に過ぎない。」と明らかに矛盾する。むしろ先の想定人口でいえば、1963年の人口に相当する。人口の減少した時期が新中国成立後では都合が悪いということであろうか。いずれにしても、信のおけない数字である。

四

収集した漢語文献におけるイスマイリー派への言及は、最近になって、明らかに変化がある。変化の方向を把握しておくことは、今後の比較調査を具体化する上で、参考に値するものと思われる。タジク族の宗教に関する記述の1980年代の基礎文献になっているのは、『塔吉克族簡史』（1982年8月新疆人民出版社）の「宗教信仰」の項（57～59頁）である。

タジク族群衆は、過去においてイスラム教のイスマイリー派を広く信仰していた。生まれた時から教徒であることを運命づけられ、終生イスラム教及びイスマイリー派から離脱することはできなかった。

他のイスラム教の民族と比べると、タジク族の宗教活動は少なく、清真寺（モスク）も少なく、教徒はラマダーンの断食をせず、メッカへの巡礼も行わず、一部の老人が毎日家で二度の礼拝をするのを除けば、一般の群衆は僅かに祭日に礼拝を行うだけである。しかし、宗教上層部の教徒に対する権威は高く、宗教の政治、経済、文化そして日常生活への影響は深刻なものがある。

宗教指導者のイーシャンは、誰もが聖人の後裔であると自称しており、職位を世襲している。しかし、彼らの管轄する教徒の人数と教派内における威望は、同じではない。各家の信徒は代々ある一人のイーシャン及びその継承者に従う。イーシャンは、管轄する教徒の比較的集住する村ごとに信徒の一人をハイリーパイに委任し、活動の一部の代理人とする。このため、村によっては、数人のイーシャンに分属していることから、一村に数人のハイリーパイがいることになる。この他に、宗教職業者として、ハスが宗教法律を管掌し、アランムーが祭日の宗教活動を執り行うが、共に一定の地区内での活動に限られている。

解放前、農業地区に居住する数人の大イーシャンが良田数百畝、甚だしくは千畝以上を占有し、主に教徒の無償労働によって耕作と収穫がなされていた。教徒は毎年必ず収入の百分の十を“教主”に納め、百分の五をイーシャンに納めなければならなかった。イーシャンが村に巡回に来る度に、所属の教徒は羊を屠殺して歓待し、贈物をしなければならなかった。イーシャンが経を講じたり、家で婚儀葬儀等があると、教徒はやはり御礼をしなければならなかった。宗教職業者は、教徒の婚儀葬儀のために宗教儀式を執り行い、或いは経を念じて病を治したりすると、比較的豊かな家は馬、ヤクあるいはラクダを、貧しい家は羊あるいは長衣を差し出さなければならなかった。クルバン（犠牲祭）の時は、各家で屠殺した羊の皮をアランムーに差し出さなければならなかった。民事訴訟は、一般にハスが経文によって裁判した。この他、タシュクルガンには二カ所の比較的規模の大きいマザール（宗教聖人の墳墓）があり、マザールの管理人が毎年冬に旗を持って村々を巡回し、彼らは福が降るを口実に、二百匹余りの綿羊、一万斤前後の穀物、百を以て数える程の衣服と布地を手に入れた。

解放前、帝国主義も宗教を利用して侵略の道具とし、外国のイスマイリー派の反動指導者を通じて、特務をわが国に派遣し、財産を盗み取り、情報を搜集し、陰謀反乱を組織し、民族団結を破壊するなど、侵略活動を行った。同時に外国の宗教指導者は長期にわたってわが国の教徒に対して大量の金銀及び絨毯等の貴重な物品を強請した。1920年前後には、酷いことに、コンストラトゥ（いわゆる宗教領事）を蒲犁に派遣し、村々に代理人を置いて、直接に宗教税（教徒の各種の収入の百分の十、家畜は総飼育数に応じて十分の一）を強請するしまつであった。この侵略システムは、1938年、蒲犁で工作活動をした中国共産党员によって国境の外へ駆逐されるまで続いた。1947年、帝国主義は再び特務を派遣し、宗教学校の建設を企て、宗教税を強請しようとしたが、タジク族牧民と宗教界の人士の強烈な反対により、この帝国主義の走狗たちは思い通りには何もできず、蒲犁を離れざるを得なかった。

解放後、中国共産党の指導の下、帝国主義侵略勢力は一掃され、宗教を利用して搾取し、広大な労働人民を抑圧する制度が、そして旧法陋習が、廃棄され、党の民族自治、民族平等団結と宗教自由の政策が貫徹され、タジク族人民と各兄弟民族人民は、共に社会主義の幸福の道を歩んでいる。

蒲犁は、タシュクルガンの旧称。1980年代におけるタジク族のイスマイーリー派への典型的な言及は、以上に代表される。「外国のイスマイーリー派の反動指導者（外国的伊斯馬依里教派的反動首領）」とか「外国の宗教指導者（外国的宗教首領）」は、誰とは言っていないが、イスマイーリー派の教主アガハーンを暗示していることは間違いない。名前も出さず、否定的にしか言及しないという論述スタイルが際立っている。

イスマイーリー派について多少の見聞と知識を得た現在、このような記述でも、多少その意味を推し量ることができるが、一般には分かりにくい記述の仕方であろう。「ラマダーンの断食もメッカへの巡礼も行わない」イスラム教徒というのは、まさに彼らがイスマイーリー派であるからなのだし、また「清真寺（モスク）が少ない」というのは、不正確である。イスマイーリー派にも宗教施設はあるけれども、それはモスクではない。グルミットでの聞き覚えであるが、ジャマハナという。ファミリー・ホームの意だそうである。モスクでの礼拝は、モスLEMであれば、宗派を問わない。イスマイーリー派もモスクで礼拝する。しかし、イスマイーリー派のジャマハナは、一般のモスクとは異なり、他派を排除する。また内部には女性用の礼拝の間があり、この点でも一般のモスクと異なる。ともかく、80年代までは、タジク族がイスマイーリー派であることへの言及そのものが乏しい。この傾向は、出版物がより一般向けであるほど、現在でも変わらない。昨年1993年2月の「民族画報」に民族自治地方紹介シリーズの一つとして、タシュクルガンタジク自治県が紹介されているが、宗教への言及は皆無である。しかし、ある程度の専門書になると、1990年代以降、イスマイーリー派への言及も具体的になっており、論調も必ずしも否定的とは限らない。

『新疆縦横』（1991年10月 中央民族学院出版社）には、186～189頁にわたり、「タジク族とイスマイーリー派」の項目が設けられており、次のような詳細な言及が見られる。

周知のように、わが国では10の少数民族がイスラム教を信奉しており、西部辺境のパミール高原に分布するタジク族もその一つである。ただタジク族のムスリムが信奉している教派は、他の民族のムスリムと異なっている。彼らが信奉しているのは、イスラム教シーア派の一分派に属するイスマイーリー派であ

る。

イスマイリー派の名称は、人名に由来する。この教派の主要な特色は、アリーの第六代の孫ジャーファル・アッサーディクの長子イスマイリーを第七代のイマームとして尊崇し、また最後のイマームと見なしていることである。それで七イマーム派と称することもある。

イスマイリー派は八世紀後半に発生した。当時ジャーファル・アッサーディクは、酒に溺れた長子のイスマイリーの継承資格を剥奪し、次子のムーサー・カージムを第七代のイマームに立てた。しかし、この決定は、イスマイリー支持者による激しい反対とイマームの地位要求にさらされた。760年、イスマイリーの死後、その擁護者たちは、イマーム継承権はイスマイリーの長子ムハンマド・ブン・イスマイリーに属すると考えたが、ジャーファル・アッサーディクは反対の態度を堅持し、承認しなかった。765年、ジャーファル・アッサーディクの死後、ムハンマド・ブン・イスマイリーの擁護者たちは、遂に一派を形成した。

イスマイリー派は、教義上、新プラトン主義の影響を受け、形成発展の過程で、複雑な宗教哲学体系を建てた。イスマイリー派によれば、コーランには外面的意味と内面的意味とがあり、内面的意味である奥義を真に究めていたのは、ムハンマドの時代ではアリーのみであり、またイスマイリーも奥義を究めていた。この主張に基づき、注釈と比喻の方法を運用してコーランを読み解く。イスマイリー派の教派活動は秘密裏に行われた。その後の発展は急速で、シリア、イラン、北アフリカ、イエーメン及び中央アジア、パミール高原等の地で広汎な影響力を持つに至った。10世紀以来、不断の分裂があり、多くの分派ができた。10世紀から12世紀にかけて北アフリカにファーティマ王朝を建てたことがある。19世紀の半ば、この派の一分派であるホジャ派の指導者ハサン・アリー・シャーがイランのケルマーンで反乱に失敗し、インドのボンベイに逃亡定住し、アガハーン(世襲指導者の称号)一世と尊称された。歴代のアガハーンは世界の大多数のイスマイリー派信徒から教主として尊ばれている。

わが国のタジク族中のイスマイリー派ムスリムは近代以来歴代のアガハーンを宗教指導者として尊崇している。アガハーンは、生ける神であり、アリー及びその正当の血統を嗣ぐとしている。宗教観念上、タジク族の信徒は、死後の靈魂不滅を信じており、明確な善悪の観念がある。多くの善行を積めば、死

してなお生き、その靈魂は天国に入り、聖人と共に永遠の幸福を享受する。悪に従った者も天に昇るが、天国に入ることはできず、七重の天に入り、雨雪となって大地に降り、泥にまみれて草木に変成し、家畜に食われて胃の中(地獄)でもみくちやにされる。タジク族中のイスマイリー派は、信仰とイスラム教の世界観(現世と来世)の対立と統一を協調させている。

信仰において、タジク族ムスリムは一般に表面的な宗教儀式を重視せず、モスクやコーラン学校も設置しない。毎日夜明けと日没の2度の礼拝をするだけで、教義に合致するとしている。正午の礼拝、午後の礼拝、夜半の礼拝は、形式義務的な礼拝であり、してもしなくともよい。イスマイリー派が表面的な宗教儀式を重視しないことから、当地のスニー派は、彼らを「内学派」と呼んでいる。

タジクムスリムが誦する経文は、「スール」と「ヤーセン」である。内容の主要部分は、ムハンマド、アリー、ハサン、フセイン、アガハーン等の称揚に関する。宗教行事を挙行する時には、ムハンマドとアリーへの賛仰が101回に1度の叩頭を交えてなされ、それが5回繰り返され、念珠で回数を記憶するので、念珠を非常に貴重品視している。メッカへの巡礼とラマダーンの断食は、一般のムスリムの二大行事であるが、タジクムスリムは、ラマダーンの断食を強調しないし、メッカへの巡礼も重視しない。日々の生活での飲食タブーを断食に等しいと見なし、アガハーンへの謁見が必須視されている。それゆえタジク地区ではアガハーンに謁見したことのある人は、全て「ハージー(朝聖者)」と称することが許されており、ムスリムから間違いなく尊重される。

マザール(聖墓)への参拝は、タジクムスリムの生活の中で重要な地位を占めている。タジクムスリムの崇拜するマザールは、数多い。その中で影響力の大きいのは、大同地区のフェリ・ムジャラドマザール、バマフェリ・ワリマザール、タシュクルガン自治県のシャウリアマザールとシャイプロマザールであり、他に莎車県のチリタイマザール等がある。これらのマザールは各々その来歴と伝説があるが、全て聖地視されている。マザールの建造には工夫がなされており、各種各様の模様や装飾が施されている。主な標識は、マザールの上に林立する太く長い棒であり、無数の細長い布きれとヤクの尻尾が吊されている。マザールの前には少なからざる羊の角と色とりどりの小石が置かれている。信徒が前に進んで参拝する時、マザールの小石に接吻する。マザールの所在地

は神聖な場所であるから、宗教上の祭りの日や記念日を除いて、信徒といえども近づくことは少ない。マザールはタジク族によって聖地視されているので、その建造には非常に工夫がある。建築的な風格のみならず、壁画、彫刻、土木技術等に民族文化的特色が見られる。タジク族の伝統芸術が集中的に反映されているとあってよいであろう。

記録によれば、タジク族は10世紀には既にイスラム教を信奉しており、彼らがイスマイリー派になったのは、その後のことである。タジク族がイスマイリー派になった経過については、多種の民間伝説がある。一説によれば、イラン人のシャタリフによってタシュクルガンに伝えられたとされる。別の説によれば、イラン人のアブド・ワリハンによって伝えられたのだという。しかし、タジク人の多くは、次のように考えている。16世紀末17世紀初、サイド・スーロというイーシャン（導師）がイランからパミール地区に入り、イスマイリー派の教義を伝えた。数十人の兵士を引き連れており、タシュクルガンに到るや、この地の統治者ジャンハングルとアイランムグルを誘い出して殺し、自立してサイドシャリハンとなって、イスマイリー派の主張を大いに広めた。歴代の統治者の支持によって、遂にイスマイリー派がタジク族の中に根を下ろしたのである。

解放前の長い年月の間に、タジク族のイスマイリー派は、深くインドのホジャ派の影響を受けた。宗教指導者は、全てアガハーンの直接委任による。アガハーンの委任を受けた宗教界上層のイーシャンは、ムーキと尊称される。彼らは、タジク族の中で大きな封建的特権を持ち、各々自分の教区があり、その地位を世襲する。所属地区の信徒は、イーシャンの管理に絶対服従しなければならない。イーシャンの部下に数人のハイリーパイがおり、宗教活動と宗教税の徴収を職掌に従って行う。イーシャンの他、宗教職業者として、ハス、アイランムー等がいる。ハスは、教法に依拠して是非曲直を判断して、民事事件を調停する。アイランムーは、宗教儀式を主催し、祭日の礼拝やムスリムの婚儀を執り行う。新中国の成立後、一連の社会改革を経て、宗教における封建的特権と搾取制度は廃止されたが、信徒たちの宗教信仰は尊重されている。

『新疆縦横』以上に参考に値するのは、『中国各民族宗教与神話大詞典』（1990年10月 学苑出版社）である。「塔吉克族部分」（559～569頁）にはアガハーンにつ

いての項目も設けてあり、論調が1980年代とは、ガラリと変わっている。全部を翻訳すると数十頁に及ぶ分量となるので、ここでは、かつてイスマイリー派の反動首領と見なされた、アガハーンへの直接的な言及がなされている項目のみを訳出し、参考に供したい。その他の項目もこれまでの欠落を補う記述が多く、タジク族の文化的基層がペルシャ的伝統に他ならないことがよくわかる。

<アガハーン>

19世紀半ば以来イスラム教イスマイリー派の最高イマームの称号。アガハーンの名義は、「父なるハーン」あるいは「生命の主宰者」である。アガハーンは、現在まで四代である。

アガハーン一世、アガ・ハサン・アリー・シャー、イランに生まれ、イスマイリー派を維持するため、当時のイラン王朝と度々戦った。後にインドのボンベイに移り住み、イスマイリー派のイマームとなった。1881年の逝去後、その子アガ・アリー・シャーがイマームを継承し、アガハーン二世となった。

アガハーン二世、子どもの頃より父の教育を受け、聡明かつ博識で、ペルシャ語、ウルドゥー語、ヘブライ語に通じていた。彼は教育への関心が深く、インドにおいて教育事業に大量投資し、ムスリムに教育を受けさせた。このことがイスマイリー派の発展に大きな促進をもたらした。彼の逝去後、その子スーダン・ムハンマド・シャーがイマームを継承し、アガハーン三世となった。

アガハーン三世、かつてインドムスリム連盟の第一主席、国際ムスリム連盟主席を務め、宗教と外交の世界での影響が大きかった。彼が十歳の誕生日の時、信徒たちが彼の体重と同じ重さの黄金、ダイヤモンド、白金を献じたところ、彼はそれを慈善事業に使った。1957年アガハーン三世は逝去する前に、アメリカのハーバード大学に在学していた、カリム・フセインをイマーム継承者に選んだ。これがアガハーン四世である。

アガハーン四世、21歳のカリムはイマームを継承した後、再びハーバード大学に戻り、1959年、極めて優秀な成績で卒業した。現在、彼に従うイスマイリー派の教徒は、25カ国二千万人に及ぶ。幾多の国家の工業界、商業界で地位を占める信徒は、個人収入の八分の一或いは十分の一を彼に献金している。アガハーンが最も興味を持っているのは、建築である。彼は建築こそイスラム教が世界に対して文化的に貢献できる最大のものと考えている。彼は三年に一度

交付する国際的な建築奨学金を設立したし、また1100万ドルを超える資金を用いて、ハーバード大学とマサチューセッツ工科大学にイスラム建築図書館と教授ポストとドクター基金を創設している。アガハーン四世による建築物は、世界各地に広がっており、彼の下の工業普及サービス財団は、既に百近くの企業を興しており、世界各地に分布している。彼は、1967年、福祉事業専門のアガハーン基金を創設した。これは赤十字に似た組織で、ケニア、パキスタン等の発展途上国で数カ所の病院と数百の治療センターを設置している。彼は、またパキスタンのカラチに2.5億ドルを投資して700床以上のアガハーン病院と医科大学を設立している。

＜ボンベイ＞

インドのマハラシュトラ州の州都、イスラム教イスマイリー派の指導者の居住地。イスラム教シーア派イスマイリー派第47代イマーム、アガ・ハサン・アリー・シャーは、この地で長く居住活動し、イスマイリー派のアガハーンの称号を獲得した。彼の逝去後、その子のアガ・アリー・シャーがイマームを継承し、アガハーン二世の称号を得て、この地でやはり長く居住活動した。イスマイリー派は、メッカに巡礼せず、教主イマームの居住するボンベイに巡礼し、イマームを拝みさえすれば、ハージーとなることができる。ボンベイに行ってイマームを拝むことがイスマイリー派教徒の最大の幸福である。ボンベイは、遂にイスマイリー派教徒の心の中で聖地となった。イスマイリー派の現在のイマーム（アガハーン四世カリム）は、パキスタンのカラチに居を移している。かつて聖地と見なされたボンベイの神聖性は次第に消失している。

＜アガハーンの足跡＞

タシュクルガンタジク自治県には数カ所のアガハーンの足跡と呼ばれている場所がある。19世紀末、アガ・アリー・シャー（アガハーン二世）がタシュクルガンを訪れ、信徒たちを見舞った。途中いくつかの場所でタシュクルガンの信徒たちが集まって、自分たちのイマームを一斉に歓迎した。イマームは、暫く立ち止まった。これらの場所が、以後アガハーンの足跡と呼ばれるようになった。タシュクルガンのバンディル峠にアガハーンの足跡と呼ばれる場所があ

る。現在でも、人が馬に乗って通過する時、馬を下りて敬虔に祈りを捧げる。

<49代イマーム>

タジク族が信奉する宗教指導者。イスラム教イスマイーリー派のニザール派は、ムハンマドから現在のアガ・カリム・フセイン（イスマイーリー派の現在のイマーム、アガハーン四世）まで、49代のイマームと数える。彼らは礼拝の度に必ず49代のイマームの名を心に念じる。そうでなければ、礼拝とは認めない。このような礼拝の方式と内容は、その他のムスリムには見られない。

アガハーンへの言及が1980年代とは様変わりである。開放経済の流れは、世界の屋根パミール高原をも急速に観光地化しつつある。アガハーンの資金力は、宗教的紐帯からもタシュクルガンタジク自治県にとっては魅力的であろう。中国側からのメッセージが窺えるような、1990年代の変化である。しかし、タジク族の言語、宗教の背後にはペルシャ文化の伝統が色濃く流れている。トルコ系ウィグル族文化の波に加えて、漢族文化の波が重なり押し寄せている現在、ペルシャ文化の伝統を生きてきたタジク族がアイデンティティーの道をどのように歩むか、それはそのままパミールの未来を占う大きな要因である。

(1994. 6. 15)